

台湾情報誌

May
2024
5

Vol. 998

交流

台湾のヘルスケア市場



台湾への緊急無償資金協力目録贈呈式

公益財団法人 日本台湾交流協会
Japan-Taiwan Exchange Association

2024
vol.998

5

目次

台湾ヘルスケア市場の動向とヘルスケア市場における日台協業の可能性

吉田涼 1

台湾短歌大賞

服部崇 11

台湾珈琲の故郷—北大演習林

菅大志 17

日本語パートナーズ台湾第8期活動報告

岡野奈々 中道敦子 24

台湾高校生日本留学事業第7期留学中間報告

高嘉彤 蘇宣帆 葉芄安 28

日本台湾交流協会事業月間報告（4月実施分） 32

※本誌に掲載されている記事などの内容や意見は、外部原稿を含め、執筆者個人に属し、公益財団法人日本台湾交流協会の公式意見を示すものではありません。

※本誌は、利用者の判断・責任においてご利用ください。

万が一、本誌に基づく情報で不利益等の問題が生じた場合、公益財団法人日本台湾交流協会は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

日本台湾交流協会について

公益財団法人日本台湾交流協会は外交関係のない日本と台湾との間で、非政府間の実務関係として維持するために、1972年に設立された法人であり、邦人保護や査証発給関連業務を含め、日台間の人的、経済的、文化的な交流維持発展のために積極的に活動しています。

東京本部の他に台北と高雄に事務所を有し、財源も大宗を国が支え、職員も多くも国等からの出向者が勤めています。

表紙写真

2024年4月10日、駐日台北経済文化代表事務所において、当協会の谷崎理事長から謝長廷・同事務所代表に対し、台湾東部で発生した地震被害に対する緊急無償資金協力（100万ドル規模）の目録が手渡されました。

写真：駐日台北経済文化代表事務所

台湾ヘルスケア市場の動向と ヘルスケア市場における日台協業の可能性

株式会社野村総合研究所 ヘルスケア・サービスコンサルティング部

吉田 涼

当協会は日系企業の台湾展開における一助とすべく、一般競争入札にて選定した外部の調査機関に調査を依頼する「委託調査事業」を実施しております。昨年度は野村総研諮詢顧問股份有限公司に「台湾ヘルスケア市場における日本企業の進出機会等に関する調査」につき調査を委託しましたところ、簡単な概要をご紹介します。

なお詳細な報告書は以下に掲載しておりますところ、ご覧いただけますと幸いです。
<https://www.koryu.or.jp/business/trade/itakuchosa.html>

高齢化の進む台湾では、2025年には超高齢化社会¹に突入すると予測され、すでに超高齢化社会である日本同様、高齢化に起因する多くの課題を抱えている。こうした背景から、台湾では、当局の旗振りの下、プレジジョンヘルス²やICT技術のヘルスケア分野への応用、再生医療などの新たなトレンドが注目され、電子機器製造系の大手企業のヘルスケア市場への参入も加速している。一方、日本では、国家成長の重要領域のひとつとしてヘルスケア産業の国際進出も期待されており、高齢化という共通の重要課題を持つ台湾市場において、日本企業の進出機会を探ることの重要性が高まっている。

野村総研諮詢顧問（以下、NRI台湾）では、2023年度に日本台湾交流協会から委託を受け、台湾ヘルスケア市場における日本企業の進出機会等に関する調査を行った。本稿では、同調査結果

の概要を紹介し、台湾ヘルスケア市場の動向を踏まえながら、ヘルスケア市場における日台協業の有望モデルを考察する。

台湾ヘルスケア市場の動向

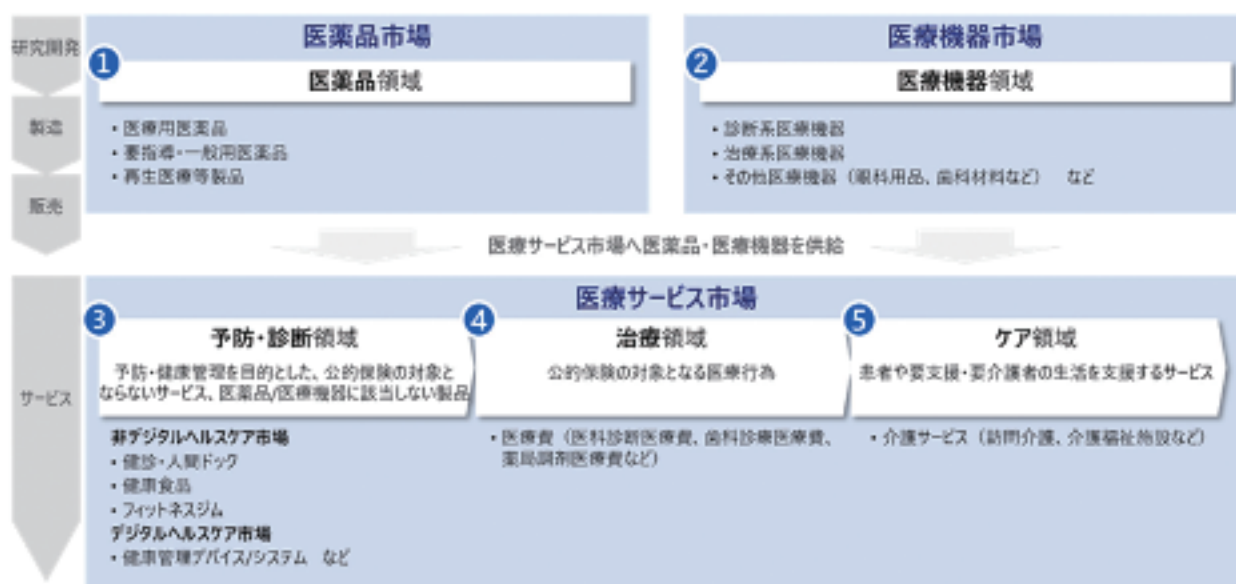
同調査においては、ヘルスケア市場を、日台共に「医薬品」・「医療機器」・「医療サービス」の3市場から構成されるものと定義した。「医療サービス」市場はさらに、個人の健康状態に沿って「予防・診断」・「治療」・「ケア」の3つの領域から構成される。

(1) 日台ヘルスケア市場の規模

同調査での推計によれば、台湾のヘルスケア市場全体の市場規模は5兆8,416億円³で、日本の同市場規模69兆2,793億円の約8%にあたる。市場全体に対し、医療サービス（治療）市場が半分

- 1 人口に占める65歳以上の割合が21%を超えた社会。WHOの定義による。
- 2 プレジジョンヘルスとは、個人のDNAや環境、生活形態及び病原体の遺伝子情報などに基づく正確な疾病の予測・予防・診断・治療を行うもの。出典：国家発展委員会「六大核心戦略産業推進プラン」
- 3 同調査では、医薬品・医療機器・医療サービス（予防・診断）、医療サービス（治療）、医療サービス（回復・ケア）の各領域の市場規模を、公開情報を基にそれぞれ算出した。さらに、ヘルスケア市場全体の市場規模を算出するにあたっては、各領域の最新年度の市場規模を使用している。また、台湾側の市場規模は、財政部台北国税局による「外僑総合所得税為替レート明細表（外僑総合所得税匯率明細表）」を参考に、日本円に換算した。

図1 同調査におけるヘルスケア市場の定義



出典：NRI台湾作成

以上と最も多くの割合を占めている点では日台が共通しているが、それ以外の市場の構成割合は異なる。台湾市場の特徴は、日本と比較し医療サービス（予防・診断）市場や、医療機器市場の構成

割合が高く、他方で医療サービス（ケア）市場の構成割合は極めて低い点である。さらに、いずれの市場でも日本と同等かそれ以上の成長率を呈している点も特筆すべき点といえる。

図2 日台ヘルスケア市場の規模

	台湾			日本		
	市場規模	市場規模に占める割合	成長率	市場規模	市場規模に占める割合	成長率
ヘルスケア市場全体	5兆8,416億円	100%	-	69兆2,793億円	100%	-
医薬品	1兆360億円	17.7%	8%	11兆1,725億円	15.3%	4%
医療機器	8,587億円	14.7%	10%	4兆4,140億円	6.0%	10%
医療サービス（予防・診断）	7,928億円	13.6%	非デジタル：5% デジタル：6%	1兆3,924億円	1.9%	非デジタル：-1% デジタル：7.8%
医療サービス（治療）	3兆711億円	52.6%	6%	45兆359億円	61.7%	1%
医療サービス（ケア）	930億円	1.4%	24%	11兆円	15.1%	3%

出典：厚生労働省「国民医療費の概況」・「薬事工業生産動態」、衛生福利部「国民医療保険支出」、矢野経済研究所、statistaなど各種公開情報をもとに、NRI台湾作成

(2) 台湾ヘルスケア市場の施策・トレンド

高齢化は台湾社会においても重要な社会課題となっており、急速に進む高齢化がもたらす影響として、高齢者の増加による医療費の増加や医療人

材の不足、都市と過疎地域間の医療リソースの偏在など、医療システム担保における課題が特に深刻化していることに加え、介護に関わる制度やサービスの充実について社会の要請が強まること

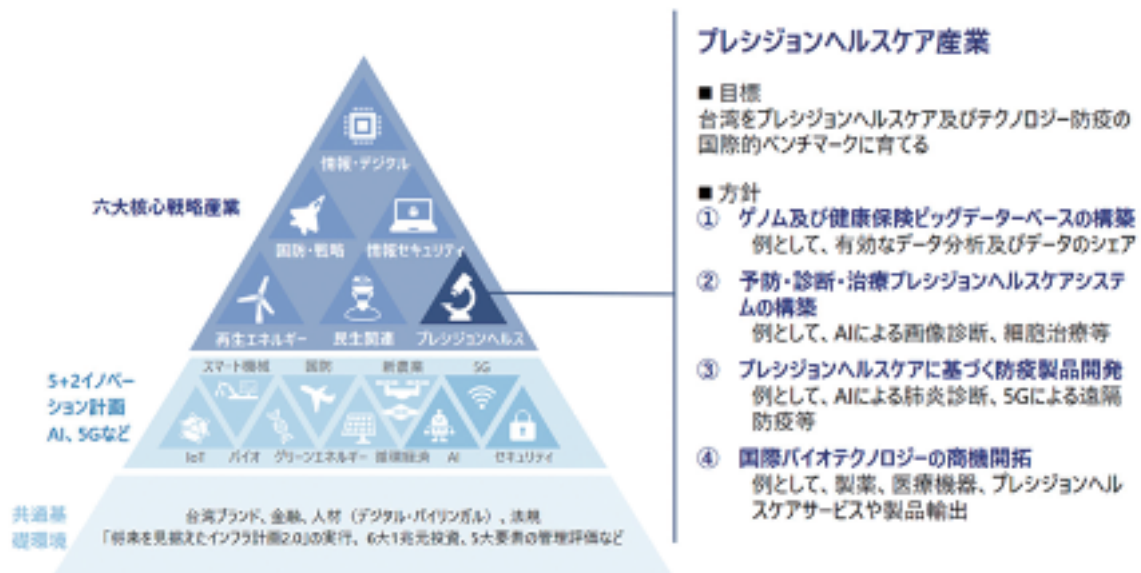
も想定される。また、少子高齢化が深刻化する社会においては、持続的な経済発展も避けては通れない課題である。

行政院国家発展委員会は、こうした課題に対応すべく、2017年に「5+2イノベーション計画」を発表した。これは「地域産業の連携」・「内需の増加」・「国際市場進出」を3つの柱とし、「バイオ医療」・「IoT」・「スマート機械」・「グリーンエネルギー」・「国防」から成る5つの産業と、「新農業」・「循環経済」から成る2つの領域を重点的に発展させる方針を定めた経済発展促進計画である。「バイオ医療」が5大産業に含まれており、当局が産業振興の文脈においてもヘルスケアを重

視していることがうかがえる。

さらに国家発展委員会は、5+2イノベーション計画を発展させる形で「六大核心戦略産業」(2020年～)を発表した。これは5+2イノベーション計画で定義した7つの産業及び領域を基礎としながら、各産業・領域を掛け合わせた6つの産業(「プレジジョンヘルスケア産業」、「情報・デジタル産業」、「情報セキュリティ産業」、「グリーン電力及び再生可能エネルギー産業」、「国防及び戦略産業」、「民生関連産業」)を定義し、これらの推進により台湾の国際競争力を高めることを目的としている。

図3 六大核心戦略産業の位置づけ



出典：国家発展委員会「六大核心戦略産業推進プラン」よりNRI台湾作成

このうち、プレジジョンヘルスケア産業では、「台湾をプレジジョンヘルスケア及びテクノロジー防疫の国際的ベンチマークに育てる」ことをゴールに掲げ、ビッグデータやAI等の先端デジタル技術を活用したプレジジョンヘルスケアへの注力を明文化している。具体的に掲げられた方針は、①ゲノム及び健康保険ビッグデータベースの構築、②予防・診断・治療プレジジョンヘルスケアシステムの構築、③プレジジョンヘルスケアに

基づく防疫製品の開発、④国際バイオテクノロジーの商機開拓の4つとなっている。

上記の当局の方針に呼応する形で、ヘルスケア市場におけるICT技術の応用や、異業種の参入が進んでいる。例えば健康管理や疾病予防などを目的とした医療機器以外のヘルスケア機器開発や、AIを利用した診断機器などの医療機器の開発に、電子機器製造系の大企業が参入している。

図4 台湾の電子機器製造における年間売上額上位10位（2022年）の企業のヘルスケア機器・医療機器への参入状況

#	企業名（通称）	年間売上 (百万台ドル)	ヘルスケア電子機器および医療機器への参入状況
1	鴻海精密工業（Foxconn）	3,803,719	参入あり ・遠隔診療用の診断機器、AI診断機器などの医療機器を開発・製造
2	台湾積體電路製造（TSMC）	2,252,321	参入あり ・医療機関・介護施設向けの遠隔見守りシステムなどを開発・製造
3	和碩聯合科技（Pegatron）	1,232,386	参入あり ・医療用重症用呼吸器などの医療機器を開発・製造 ・大手コンタクトレンズ製造企業・品類を傘下を持つ
4	廣達電腦（Quanta）	1,177,705	参入あり ・「QOCA」というヘルスケア・医療機器ブランドを作り、ウェアラブルデバイス、医療機関向けアータ統合クラウド、X線画像処理システムなど、多様な機器を開発・製造
5	仁寶電腦工業（Compal）	1,003,643	参入あり ・医療機関予約アプリなどの医療機関向けシステム、5Gオンライン診断機器などの医療機器を開発・販売
6	緯創資通（Wistron）	686,829	参入あり ・医療機器製造子会社「緯創醫療技術」を立ち上げ、医療機器のOEMを行う
7	英業達（Inventec）	452,366	参入あり ・血中酸素濃度・呼吸モニタリングシステム、体温計、尿流計、心身のエネルギーの分析デバイス、スマートウエストベルトなど、様々な機器を開発・製造
8	聯發科技（Media Tek）	332,181	参入あり ・台湾大学医務院センター・台湾大学電算情報学院とともに医療電子研究開発プロジェクト「肺結核呼吸器感染症の遠隔管理プラットフォーム」に参加
9	友達光電（AUO）	215,170	参入あり ・子会社として、医療・介護DXソリューションの「友達医療」を設立し、医療・介護サービス事業者向けのシステムや、AI見守り機器などを開発・製造
10	聯華電子（UMC）	210,084	参入予定 ・センサー大手「sensation」と医療向けセンサーの開発における協業を発表している

出典：国家發展委員会「六大核心戦略産業推進プラン」よりNRI台湾作成

新薬・新技術の開発は一般的に高額な資金を必要とするが、台湾のバイオ医療企業は中小規模の企業が多く、資金調達には常に課題を抱えている。この課題に対応すべく、台湾では「バイオ新薬産業発展条例」（2007年～）が制定され、バイオ新薬開発を行う企業に対する研究開発や人材育成等への投資額に応じた法人税の控除やこれらの企業へ投資する営利企業への税制優遇などの特例措置を設けられていた。2021年には、同条例が「バイオ医療産業発展条例」へ改正され、約100億台湾元の予算化がなされた上で、対象を再生医療やプレジジョンヘルスケアの研究開発企業や医薬品開発製造受託（以下、CDMO）企業まで大幅に拡大し、人材・投資両側面から更なるバイオ医療への参入を促進している。

バイオ製薬領域におけるCDMO産業振興を目的とし、2023年5月に経済部の主導で台湾最大級のCDMO企業として「バイオ医薬製造公司」が設立され、当局予算より60億台湾元（約270億円）の出資を受けた。mRNAワクチン、核酸医薬品、タンパク質医薬品、細胞治療製品などを重点領域とし、新竹バイオメディカルサイエンスパークに、5,000坪の工場建設を予定している。

また市場への投資も目覚ましく、2022年から2023年上半期における台湾ヘルスケア市場のアーリーステージスタートアップに対する投資は投資対象領域別件数で1位（110件）、金額はエネルギー領域に続く2位（約880億円）である。特に再生医療などバイオ医療やCDMO企業が注目を集める医薬品領域が市場への投資をけん引し

		2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
Deals	Health and Biotech	59	59	58	57	74	83	77	75
	Energy	4	5	9	17	26	44	60	64
	Hardware	53	52	52	51	71	62	57	50
	IT and Software	16	18	23	33	37	38	34	41
	Manufacturing	40	35	37	34	38	23	31	32
	Media and Entertainment	14	22	22	14	18	18	20	21
Amount (\$M USD)	Energy	1.9	14.3	50.5	131.5	51.3	393.9	896.4	715.3
	Health and Biotech	235.9	216.0	102.1	122.9	124.6	201.4	675.8	380.8
	Hardware	102.4	91.0	84.4	133.7	153.1	233.5	258.8	322.9
	Manufacturing	52.7	45.3	57.7	94.1	40.4	45.9	115.3	134.2
	IT and Software	14.6	25.6	53.1	54.1	90.3	38.7	143.3	129.2
	Privacy and Security	8.6	6.2	11.8	21.2	26.7	2.7	25.6	88.7

© Deals, Amountともに、累計期間2015/01/01-2022/12/31

出典：FINDIT「2023年台湾アーリーインベストメントに関するアニュアルレポート総覧

ている。

海外展開の面では、中国大陸への高い経済依存度を低減し、リスク分散と経済成長を図るため、「新南向」施策（2016年～）と呼ばれる経済戦略が推進され、東南アジアやインド等を含む18の国々と、経済や貿易などの面での協力強化を目指

している。同施策において、医療分野では「1国1拠点」施策（2018年～）が推進された。この施策では、インドネシア、インド、ベトナム、タイ、フィリピンを重点国とし、各国に台湾の大病院がそれぞれ医療拠点を設け、現地医療人材の育成などが行われている。

図5 「1国1拠点」施策



出典：行政院、衛生福利部「新南向第一期成果発表資料（2021年）」をもとに、NRI台湾作成

ヘルスケア市場における日台協業の有望モデル

こうしたヘルスケアに関連した戦略や産業振興が推進される台湾において、日本企業にはどのよ

うな機会があるだろうか。同調査では、20の日台ヘルスケア関連企業・団体へのヒアリング調査結果をもとに、ヘルスケア市場において日台の協業が有望なモデル（以下、日台協業モデル）を計7つ抽出した。

図6 日台協業モデル一覧

	#	日台協業モデル（日本企業視点）	主な対象市場	日本の業界および企業・団体へのメリット
研究開発	1	研究開発・臨床試験の委託	・ 医薬品 ・ 医療機器	・ より安いコストでの研究開発 ・ 研究開発のスピードアップ ・ 人手不足問題への対応
	2	有力医薬品のライセンス取得	・ 医薬品	・ バイオラインや製薬機材の活用
	3	台湾スタートアップへの投資	・ 医薬品 ・ 医療機器	・ オープンイノベーションの促進
製造	4	既存プロダクトの製造委託	・ 医薬品 ・ 医療機器	・ より安いコストでの製造 ・ 製造コストの削減 ・ 製品品質の向上 ・ 人手不足問題への対応
	5	日本国内や第三国での販売委託	・ 医薬品 ・ 医療機器	・ 製品販売の拡大
販売	6	台湾域内や第三国への販売委託	・ 医薬品 ・ 医療機器	・ 台湾域内や第三国市場への進出
	7	高齢化に伴う課題への対応に関する、技術開発および施設運営サポート	・ 医療サービス	・ 日本の医療・介護サービスや関連する製品を輸出 ・ 台湾市場への進出や出資の促進

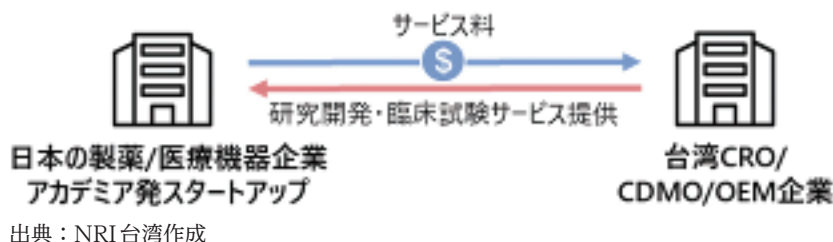
出典：NRI台湾作成

(1) モデル1. 研究開発・臨床試験の委託

台湾では、「5＋2イノベーション計画」や「バイオ医療産業発展条例」をはじめとする当局の後押しもあり、医薬品および医療機器の研究開発や臨床試験を受託する企業が多く登場している。また、一般的に、台湾の人件費は日本のそれよりも安価であり、同時に日本に引けを取らない品質を有する。こうした背景から、日本の製薬・医療機器企業や、アカデミア発スタートアップが、台湾

の研究開発・製造受託企業（CRO/CDMO/OEM等）に医薬品・医療機器の研究開発を委託することで、より安いコストでの研究開発が可能となるのではないかと。また、コストダウンに加えて、研究開発のケイパビリティ増強といったメリットも想定される。企業によっては、少子高齢化や働き方改革等に伴う人手不足問題への対応にも期待ができるだろう。

図7 「モデル1. 研究開発・臨床試験の委託」のイメージ



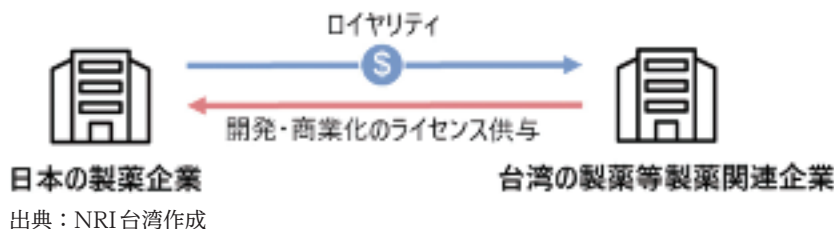
ヒアリング調査より、台湾企業は日本企業からの研究開発・臨床試験受託に意欲的であること、日本企業としてもコストが安く品質が保てる場合には、台湾企業への研究開発・臨床試験委託が検討対象となり得ることが分かった。実際に、希少疾患向け医薬品の研究開発を行うJCRファーマ社（日本）は、Mycenax Biotech社（台湾）に研究開発の一部を委託しており、さらに、研究開発のキャパシティー増強を目的に、2022年7月よりMycenax Biotech社に増資し関連会社化に至った⁴。

(2) モデル2. 有力医薬品のライセンス取得

台湾では、上述の通り多くのバイオスタートアップが出現しており、バイオスタートアップへの投資も活発で、ビジネスが育ちやすい素地がある。日本の製薬企業が、こうした台湾のスタートアップ等製薬関連企業の開発する有力医薬品のライセンスを取得し、日本での研究開発・商業化を担うことで、開発パイプラインや製品の種類を拡充できるのではないかと。

ヒアリング調査より、台湾企業は海外企業へのライセンス供与経験が豊富にあり、日本企業への

図8 「モデル2. 有力医薬品のライセンス取得」のイメージ



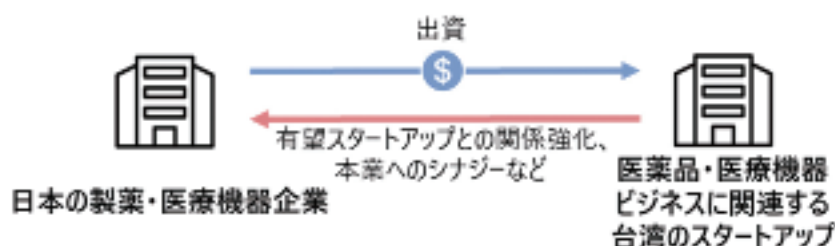
4 Mycenax Biotech.“日本JCR Pharmaceuticals 入股永昕生醫，成為第一大股東”（<https://www.mycenax.com.tw/news-detail.php?id=14>, 2024年1月アクセス）

ライセンス供与についても大変関心があること、日本企業も創薬技術を持つスタートアップへの投資に意欲的であることが分かった。実際に、iPS細胞関連研究試薬の製造・販売などを行うリプロセル社（日本）は、Steminent Biotherapeutics社（台湾）の開発する再生医療製品の日本における開発・商業化に関する独占的ライセンスを獲得し、臨床試験を実施している⁵。

(3) モデル3. 台湾スタートアップへの投資

台湾では、当局がプレジジョンヘルスケア産業を牽引していることから、バイオスタートアップだけでなく、病理診断AIや、創薬AI等、医療×AIの技術を持つスタートアップも多く出現している。日本の製薬・医療機器企業が、医薬品・医療機器ビジネスに関連する台湾のスタートアップに出資することで、オープンイノベーションを促進することができるのではないかと。

図9 「モデル3. 台湾スタートアップへの投資」のイメージ



出典：NRI台湾作成

ヒアリング調査より、台湾企業は日本の製薬・医療機器企業から出資を受けることを前向きに捉えていること、日本企業も創薬技術やデジタル技術を持つスタートアップへの投資に意欲的であることが分かった。実際に、小野薬品工業の子会社である小野デジタルヘルス投資合同会社（日本）は、医療診断支援AIソリューションを開発するベンチャー企業・aetherAI社（台湾）に出資している⁶。

(4) モデル4. 既存プロダクトの製造委託

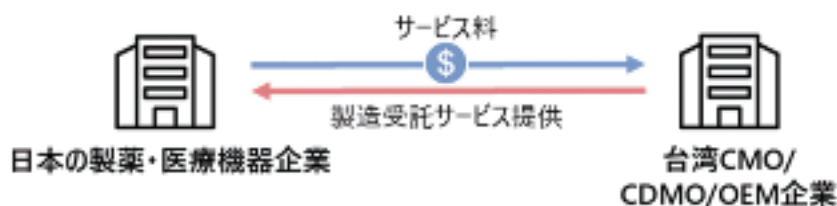
台湾では、經濟部主導でCDMO企業「バイオ医薬製造公司」が設立されたり、民間企業のCDMO事業への投資が増加したりと、CDMO産業の発展が見込まれる。また、台湾を代表する大手電子機器製造企業がこぞってヘルスケア機器

や医療機器事業に参入し、製造受託まで担うなど、ヘルスケア分野のOEMも活発化している。さらに、上述の通り、一般的に、台湾の人件費は日本のそれよりも安価であり、同時に日本に引けを取らない品質を有することから、日本の製薬・医療機器企業が、台湾の製造受託企業（CMO/CDMO/OEM企業）に対して既存プロダクトの製造を委託することで、より安いコストでの製造が可能となるのではないかと。また、コストダウンに加えて、製造のケイパビリティ増強といったメリットも想定される。さらに、日本国内の災害時を見据えた製造拠点のリスク分散という観点からも大きなメリットがある。企業によっては、少子高齢化や働き方改革等に伴う人手不足問題への対応にも期待ができるだろう。

5 リプロセル、「リプロセルの再生医療」（https://reprocell.co.jp/regenerative_medicine/, 2024年1月アクセス）

6 小野デジタルヘルス投資合同会社（<https://www.onodigitalhealth.com/ja/portfolio/aetherAI>, 2024年1月アクセス）

図10 「モデル4. 既存プロダクトの製造委託」のイメージ



出典：NRI 台湾作成

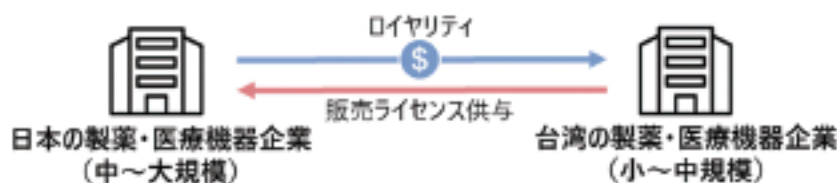
ヒアリング調査より、台湾企業が日本企業からの製造受託に意欲的であること、日本企業としてはコストが安く品質が保てる場合には、台湾企業への製造委託が検討対象となり得ることが分かった。実際に、WHILL社（日本）は、電動車いす「WHILL」について、開発後すぐに世界市場での販売を目指し、製造受託企業を探した結果、医療機器の国際製造規格を持つOEMメーカー・州巧科技（台湾）での製造に至った⁷。

(5) モデル5. 日本国内や第三国での販売委託

台湾の製薬・医療機器業界には中小企業も多い一方で、台湾域内の市場には限りがあることから、どのような規模の企業であっても常に海外進

出を視野に入れている。特に、高齢化という共通の課題に直面し、医療のレベルも近く、地理的な距離も近い日本は、海外市場として最初の選択肢となることも多い。ところが、中小規模の製薬・医療機器企業の多くは営業リソースが不足している。そこで、日本の製薬・医療機器企業が、台湾の製薬・医療機器企業の日本国内における販売を受託することで、台湾企業の日本市場進出をサポートすると同時に、日本企業としては製品の種類を拡充できるのではないかと。さらに、日本国内のみならず、日本の製薬・医療機器企業が販売チャネルを持つ第三国（欧米など）での販売を受託することも可能ではないかと。

図11 「モデル5. 日本国内や第三国での販売受託」のイメージ



出典：NRI 台湾作成

ヒアリング調査より、台湾企業は日本市場開拓及びチャネル開拓時の日本企業との協業に前向きであること、日本企業も台湾企業からの受託に前向きであることが分かった。実際に、富士製薬工業（日本）は2021年8月、ジェネリック製薬を行うLotus Pharmaceutical社（台湾）社の開発したジェネリック医薬品について、日本国内での独占的な製造・販売を行う権利を取得した⁸。両

社はこの他にも、双方の製造機能を相互補完する点や、Lotus社のASEAN市場の販路を通じた富士製薬製品の販売などに関する協業も視野に入れ、資本業務提携を結んでいる⁹。

(6) 台湾域内や第三国への販売委託

モデル5とは反対に、海外進出におけるリソースが不足する日本の製薬・医療機器企業が、台湾

7 シャカイカ！.“今までの車いすとは違う！すべての人の移動が楽しくスマートに！次世代電動モビリティ「WHILL」”(https://www.shakaika.jp/blog/10586/whill-inc/, 2024年1月アクセス)

8 富士製薬工業株式会社 (https://www.fujipharma.jp/_upload/6d6d4fef5280d29d2c916577cf4139ea6ae13d52.pdf, 2024年1月アクセス)

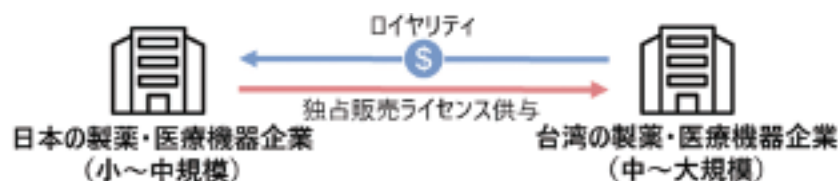
9 富士製薬工業株式会社 (https://www.fujipharma.jp/_upload/20190320.pdf, 2024年1月アクセス)

の製薬・医療機器企業に対し、台湾域内および東南アジアを含む第三国における販売を委託することで、限られたリソースのもとでも、台湾および東南アジア市場の開拓ができるのではないかと。

台湾企業は、台湾域内の市場規模に限界があることから、多くの企業がビジネス開始当初より海外進出を見据えている。また、東南アジア諸国の経済界では多くの華僑が活躍していることから、

台湾企業であることの強みが活かしやすく、東南アジアへのチャンネルを有する企業も少なくない。さらに、台湾当局が進める新南向政策の一環として、東南アジア諸国に台湾の大病院が拠点を設立し、ヘルスケア領域の交流がますます強まっている。こうした背景もあり、台湾企業のリソースを活用しつつ東南アジアに進出することは、日本企業にとって一つの選択肢になると言えるだろう。

図12 「モデル6. 台湾域内や第三国への販売委託」のイメージ



出典：NRI台湾作成

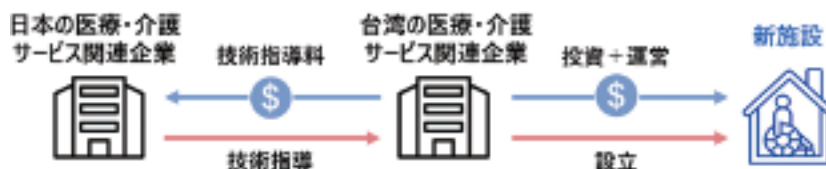
ヒアリング調査より、台湾企業としては、台湾の強みを活かせるモデルであり大変意欲があること、台湾・東南アジアの拠点を持たない日本企業は同モデルに前向きであることが分かった。実際に、イタリアの製薬企業Chiesi社は2022年10月、台湾および中国、東南アジアなどへの販売チャンネルを持つ台湾の製薬企業・友華生技に対し、台湾・シンガポール・マレーシア・フィリピンでの自社製品（希少疾患向けの注射薬）の独占販売ライセンスを供与する¹⁰ことで、東南アジア市場に進出している。

（7）モデル7. 高齢化に伴う諸課題への対応に関する、技術指導および施設運営サポート

台湾は日本同様に高齢化が進行しており、その進捗は日本の後を追う形となっている。日本で

は高齢化を契機とした諸課題に対応すべく、医療や介護に関わるサービスが大いに発展しており、日本の後を追って高齢化が進行する台湾でも、同様の産業発展が見込まれる。そこで、いち早く深刻化する少子高齢化に対応する、日本の医療・介護サービス関連企業・団体が、台湾の医療・介護サービス関連企業・団体に対して、高齢化に伴う諸課題への対応に関する技術指導や施設運営を行うことに、ビジネスチャンスがあるのではないかと。さらには、そうした協業から、日本の医療・介護サービスや関連する製品を束ねた輸出、台湾市場への進出や出資を伴う協業など、派生的なメリットも期待できる。本モデルの対象領域の例としては、介護サービスやがん治療などが想定される。

図13 「モデル7. 高齢化に伴う諸課題への対応に関する、技術指導および施設運営サポート」のイメージ



出典：NRI台湾作成

10 友華生技 (<https://www.oepgroup.com/zh-TW/news/detail/20221025/1>, 2024年1月アクセス)

ヒアリング調査より、台湾企業は日本企業からの技術指導受入れに意欲的であること、日本企業も今後は単なる製品・サービスの輸出だけでなく、経験やナレッジを活かしたビジネスモデル構築を行っていく必要があるという課題意識があることが分かった。実際に日本企業による製品輸出および技術指導により新たな施設が誕生した例として、日立製作所（日本）と台北榮民総合医院（台湾）のケースが挙げられる。日立製作所は2023年5月、台北榮民総合医院に対して重粒子線がん治療システムを納品し、さらに日本の技術チームが重粒子線がん治療センターの新設計画策定をサポートし、台湾で初めての重粒子線がん治療センター開設に至った¹¹。

ヘルスケア市場における日台協業の課題および対策

ここまで7つの日台協業モデルを整理してきたが、全てのモデルに共通する課題として、スピード、コミュニケーションおよび言語、マッチングの3点が挙げられる。台湾との協業を検討する日本企業、および日台協業を支援する団体においては、上述した各モデルに固有の課題とともに、これら3つの課題にも対応することが望まれる。

まず、スピード面では、欧米等の企業と比較し、日本企業は意思決定や契約プロセスのスピードが遅い点が、多くの台湾企業より挙げられた。勿論、相手が信頼に足る企業であるか慎重に評価することは必要不可欠であるが、あまりにペースが異なれば、よりペースの合う他国企業が協業相手として選ばれてしまう懸念もある。こうした課題に対

しては、意思決定可能な人物が商談に参加するなど、協業に係る意思決定プロセスをシンプル化することも一つの対応策ではないか。

次に、コミュニケーションおよび言語面では、日本企業とは、日本人を通さないとスムーズにコミュニケーションが取れない点について、多くの台湾企業から指摘があった。既にグローバル化している企業は対応できている場合もあるだろうが、これから海外展開を進めていく企業にとっては、対台湾の協業に限らず、喫緊の課題となっているであろう。台湾企業の大企業ともなれば日本語を話せる人材を抱えていることもあるが、基本的には英語でのよりダイレクトなコミュニケーションができる素地を整えておく必要がある。

最後に、マッチング面では、日台双方において協業候補を見つけづらいという課題が、日台のヘルスケア企業から多く聞かれた。まず、日台協業を検討する日台双方の企業が、自社のアピールポイントや希望する協業モデル等をまとめた資料を複数言語で用意しておくことは有効だろう。その上で、個々の企業が、日台双方のヘルスケア関連の展示会等に参加し、自ら協業相手を開拓することは第一歩である。一方で、個々の企業が単独で開拓できる企業数には限りがあるため、ヘルスケア関連領域における日台協業に特化したマッチングイベントを開催することも一手ではないか。また、台湾ヘルスケア産業に関する積極的な情報発信を、セミナーやWebを通して行っていくことで、台湾ヘルスケア産業全体の認知を向上することも重要ではないか。

11 台北駐日経済文化代表処 (https://www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/91630.html, 2024年1月アクセス)

台湾短歌大賞

日本台湾交流協会台北事務所副代表 服部 崇

1. はじめに

このたび、当協会台北事務所主催の文化事業の一つとして短歌についてのイベントを実施した。短歌とは、詩歌の形式の一つで、五・七・五・七・七の三十一音からなる短い詩であり、古くは奈良時代の『万葉集』の作品にも見られる日本の伝統文化の一つである。日本国内では最近の短歌ブームで短歌を詠む人も増えているようである。

台湾では、その歴史的背景から日本語世代が中心となって立ち上げた「台北俳句会」、「台湾川柳会」、「友愛会」等、日本の和歌や日本語を愛好する団体が長く活動を行っており、毎月台北でそれぞれの例会が開かれている。短歌については、「台湾歌壇」が半世紀余りに亘って活動を継続しており、平成26年春の外国人叙勲においては当時「台湾歌壇」の代表を務めていた蔡焜燦氏が旭日双光章を受章するなど日本でもその活動は高く評価されてきた。

近年、短歌をたしなむ日本語世代が年々減少する一方で、日本の漫画やアニメ等の影響で日本の伝統文化に関心を持つ若者が一定数いるところ、特に日本語を学ぶ台湾の若い世代に対して、日本の伝統文化である短歌という新たな切り口から、自らの日本語スキルをさらに高め、より深く日本文化を理解してもらう一助として、台北事務所広報文化部で今回のイベントを実施する運びとなった。

2. 台湾短歌大賞

(1) 作品の募集

2024年3月3日のイベント開催に併せて、同

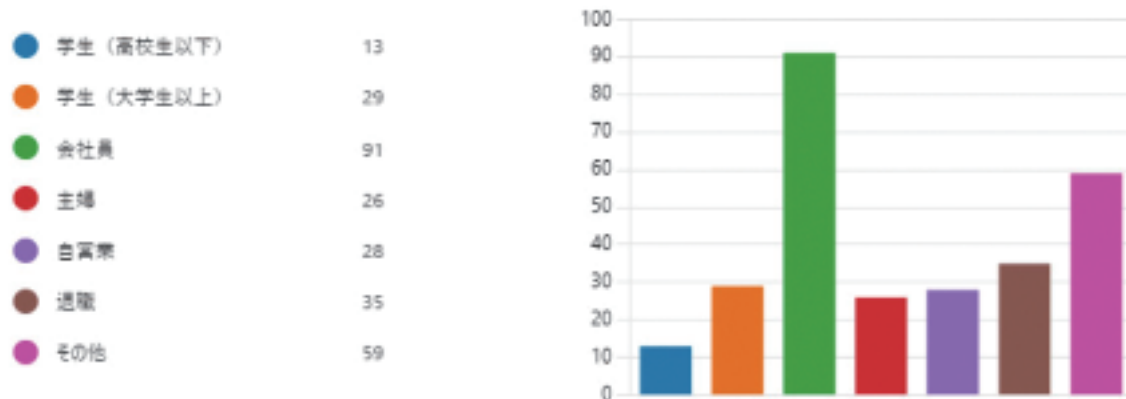
年1月中旬より約1ヵ月間、「台湾短歌大賞」と題し、オンライン上の投稿フォームを作成して広く一般から短歌の作品を募集した。作品のテーマは「台湾」に関することやもの、場所などであれば自由に創作可能とし、また台湾人に加えて日本人も応募可能とした。台湾での短歌のコンクールは筆者の知る限り初めての試みであり、企画の段階からやや手探りな状態ではあったものの、北嶋徹・台湾歌壇前事務局長にも助言を頂きながら作品の募集を開始し、当協会のホームページ・フェイスブックに加え、台湾歌壇や今回のイベントにご後援を頂いた台湾日本人会にも協力を得て広報を強化した結果、大方の予想を上回る278首の作品が集まった。

(2) 応募状況

今回の応募者を年齢からみると、60歳以上が84人と最も多かったが、次いで12歳～30歳の応募が68人と、企画段階で特にターゲットとしていた若い世代からの応募が多くあった。また、30代、40代、50代からも総じてバランスよく応募があり、さらに最年少は小学生、最高齢は恐らく95歳と、幅広い世代から今回の企画へ関心が寄せられたことが分かる。

応募者の居住地からみると、台湾では台北、新北、台南、台中、高雄、桃園などの大都市に加え、新竹、彰化、雲林、嘉義、屏東、宜蘭など各地から応募があった。また、今回は日本からの応募も可能だったため、台湾への特別な思いを寄せる日本に住む方々からも多くの作品が投稿された。

応募者の職業からみると、会社員が最も多く、次いで学生という結果だった。短歌は、五・七・



図表：応募者の職業（単位：人）

五の俳句や川柳と比べると日本語学習者にとって創作難易度が高いと言われがちではあるが、上記の通り、若い世代からの応募が多くあったことを考えると、今回のイベントを通じて短歌に挑戦してくれた学生や大学卒業間もない社会人が多くいることが分かる。

応募作品に対する選考は当所で行った。選考委員には外部から、若手歌人の三原由起子氏（3月3日も講師として参加）、朱秋而・台湾大学日本語文学科教授、三宅教子・台湾歌壇事務局長が加わり、厳正なる選考を経て、下記（3）イ. の通り優れた作品8首が選出された。

（3）3月3日のイベント

ア. 講演

本講演の講師として、歌人の三原由起子氏をお招きし、筆者と対談する形で、短歌の魅力などについてお話しいただいた。三原さんは、福島県双葉郡浪江町の出身。高校時代から短歌を詠み始め、1997年第1回全国高校詩歌コンクール短歌部門優秀賞受賞。2013年第24回歌壇賞候補。これまでに出版した著書2冊はふるさと浪江町の商品が多く収録されているほか、表紙デザインに台湾の客家花布（花柄生地）が用いられ台湾を詠んだ歌も収録するなど、台湾好きな三原さんならではの一面もうかがえる。対談の中で三原さんからは、





「短歌は、(自身にとって)感情を表現するのに適した詩形で、感情を込める下の句から作り始めることが多い。紙とペンがあればすぐ作ることができるのも魅力」などとお話があった。会場の参加者も、熱心に話に耳を傾け、中にはメモを取る姿も見られた。

イ. 受賞作品の発表と表彰

講演に続いて、「台湾短歌大賞」1名、「交流協会台北事務所代表賞」1名、「副代表賞」2名、「広報文化部長賞」1名、「台湾日本人会賞」1名、「台湾歌壇賞」1名、「日台交流賞」1名の計8名の方の発表と、その中でイベント当日に出席できた4名の方の表彰式を行い、賞状と副賞をお渡しした。

「台湾短歌大賞」

花燈を下げ手つなぎて娘とゆきし元宵の宮いま杖とゆく(台中・林聿修さん)

最高賞の「台湾短歌大賞」を受賞した林さんは、今年95歳になられ、台湾歌壇などを通じて台湾で長年短歌を詠んできたという。「この度は未熟な作品をおとりあげくださり誠にありがたく恐縮に存じます。皆様のお励ましに報わせていただきますように、命の限り短歌を学んでまいりますの

で、どうぞ引き続きお導き賜りますようお願い申し上げます。本日は体調を崩しまして参列する事ができません、失礼させていただきます。ありがとうございます。」とハツとするほど達筆な手書きの手紙を寄せてくださった。



写真：林聿修さん(ご本人より提供)

「日本台湾交流協会台北事務所代表賞」

淡水に柔らかに降る春雨を集めてきみと作る阿給 (日本・遠藤雄介さん)

受賞者の遠藤さんからは、「大好きな台湾と日本の交流を短歌に詠めること自体をただただ楽しみましたので、受賞の報に驚き、また大変光栄に思っております。日本の『油揚げ』の音から転じた『阿給』は日台交流の象徴のようであり、その短歌を台湾で尽力されている皆様に読んでいただけたという機会に、改めて感謝いたします」と日本からメッセージが届いた。

「日本台湾交流協会台北事務所副代表賞」(2名)

阿里山鷲、雲海の果てに、手を伸ばし、昨日の約束、花の朝露(新北・曹立德さん)

受賞者の曹さんは、日本舞踊の西川流に携わる中で、和歌をテーマにした踊りに触れる機会があり、短歌に興味を持たれたとのこと。今回の作品募集をきっかけに、阿里山で見た壮大な光景に自身の家族への思いを重ねて、初めて取り組んだ短歌で受賞した驚きと喜びをコメントした。



台南の空気は甘い箸持って空中に振って綿飴ゲット (台南・杜宜庭さん)

台南在住の杜さんは、故郷の台南の特徴を歌に詠み込もうと考え、作った作品だったとのこと。若者らしい軽やかな作風が評価されての受賞となった。



「日本台湾交流協会台北事務所広報文化部長賞」

あたたかい台湾だから人もまた豆花みたいなやさしさがある(日本・冨田真純さん)

冨田さんは、旅行で訪れた際に触れた台湾の人たちの暖かさを大好きな豆花に例えて詠んだと日本からメッセージを寄せてくれた。

「台湾日本人会賞」

ルーローファン異国の地より戻り来て故郷の味と舌鼓打つ(台北・藤本紀子さん)

台北に住む藤本さんは、外国から台湾へ戻ってきた台湾人のご主人が好物のルーローファン(魯肉飯)を味わう様子を歌にした。ご主人への思いが伝わってくるよい作品である。



(プレゼンター(右)は、台湾日本人会日台交流部会会長・村田温様)

「台湾歌壇賞」

しゅぼしゅぼと畑を走る五分車は糖都虎尾のど甘い記憶(雲林・李玉璽さん)

雲林在住の李さんは、故郷・虎尾の象徴的な風



(プレゼンター(右)は、台湾歌壇事務局長・三宅教子様)

景を歌に詠み込んだ。台湾の中南部にはかつて多くの製糖工場が建設されたが、その一つの虎尾製糖工場は1909年の創立当時、「東洋一」とも称された大規模な工場であり、虎尾は「糖都」(砂糖の都)とも呼ばれたという¹。砂糖の原料であったサトウキビなどの運搬のため、製糖用鉄道が活用されたが、この鉄道のレール幅が世界標準の約半分だったことから、「五分車」と呼ばれていた。この製糖用鉄道は今も一部残され、サトウキビ収穫の季節になると虎尾の街を走り抜けるのを見ることができる。李さんは、大学で漢詩を専門に教えており、今回の受賞作品を基に漢詩を作り、受

賞式場で台湾語で漢詩を吟じるというパフォーマンスを披露してくれた。

「日台交流賞」

少年ら片瀬の浜で円になり故郷偲んで「椰子の実」歌う(日本・石川公弘さん)

日本在住の石川公弘さんは90歳。小学校校長だった父が、台湾少年工が多く住む宿舍の舎監に転じたため、少年時代、台湾少年工は非常に身近な存在だった。戦後、長らく連絡が途絶えたが、戒厳令が解かれ父が亡くなった後の1992年から



(後日、当所訪問時に撮影)



1 みんなの台湾修学旅行ナビ https://taiwan-shugakuryoko.jp/spot_central/2580/



再び元・台湾少年工との交流が始まり、「高座日台交流の会」（高座会）の会長を長年務めた。受賞作品は、この台湾少年工を詠んだものである。今回の受賞は、台湾少年工が日本の教科書に掲載されることが決まり、また「高座会」台湾側の会長を長年務めた李雪峰さんが亡くなられたのと同じタイミングだったとのことで、非常に運命的なものを感じられたとメッセージを寄せた。

ウ. 作品の講評

最後に、当日の参加者の応募作品すべてについて、講師らより講評やアドバイスを行った。参加者同士は知り合いではなかったものの、それぞれの作品に込めた思いや作品の背景などが会場に共有されることで、短歌を通じて双方向の交流が生まれ、会場があたたかい雰囲気包まれた。

3. おわりに

今回、初めて台湾で短歌のコンクールが開催され、どれほどの作品の応募があるか企画段階では予想がつかなかったが、278首もの作品の応募があり反響の大きさに大変驚き、台湾の日本語を学ぶ方々の層の厚さを改めて実感することとなった。「どの作品も台湾についての思いが込められており、(選考のために)読んでいても大変楽しく、応募数は多かったがあっという間に読んでしまった」と講師の三原由起子さんも仰っていたが、まさにその通りであった。今回のイベントを通じて、短歌のように日本の伝統文化という切り口から、日本語の面白さや奥深さを味わってもらえていたら幸いである。今回の事業へご協力いただいた方々及び素敵な作品をご応募いただいた方々へ感謝申し上げたい。

台湾珈琲の故郷—北大演習林

北海道大学農学博士・北海道大学パートナー台湾
菅 大志

はじめに

北海道帝国大学が台湾で珈琲栽培をしていたことをご存知だろうか？

筆者は南投埔里の北大演習林（北海道帝国大学農学部附属台湾演習林）での珈琲栽培について報告し、北大演習林百年祭を開催した。その様子は本誌の2017年「演習林と珈琲の百年物語」^[1]と2018年「続・演習林と珈琲の百年物語」^[2]に詳しく書いた。また台湾のC³offee 珈琲誌に「台湾珈琲的歴史再発現埔里演習林」^[3]を発表した。

その後、さらに北大演習林珈琲の研究を進め、2018年4月から2020年6月、北大生協「きぼうの虹」に『台湾通信』として14回連載した^[4]。そして2022年7月-2023年4月、国立自然科学博物館 想入啡啡：細説珈琲特展「臺灣珈琲過去與現代的連結」にその成果が展示され、台湾珈琲の故郷として北大演習林が認知されるようになってきた。

本稿では、日本統治時代の台湾において、北大校長からスタートした珈琲栽培が、駅伝の襷のごとく北大卒業生たちにつながり、北大演習林でゴールした足跡をたどってみたい。

台湾総督府殖産局と北大卒業生とのつながり

北大（札幌農学校・東北帝国大学農科大学・北海道帝国大学）卒業生が最も早く赴いた、最も人数の多い場所、それが台湾である。日本が台湾を領有した1895年から終戦までの50年間、北大卒業生を台湾に送り続けた。このことは、「台湾へ渡った北大農学部卒業生たち」^[5]に詳しく述べられている。

台湾総督府は「農業台湾」の基本政策を掲げ、開拓期の北海道で農学を専攻した北大卒業生は同殖産局で重用されていた。

台湾総督府殖産局では珈琲栽培の試験が行われており、この珈琲栽培を担い北大演習林までつなげる北大卒業生があらわれた。

さらに、この北大卒業生と台湾総督府殖産局をつなげる基点を作ったのが殖産局長の橋口文蔵と新渡戸稲造であり、台湾における珈琲栽培を推進した重要人物でもあった。

橋口文蔵（札幌農学校校長）（台湾在勤1895-1898）



図1 橋口文蔵（北海道大学大学文書館所蔵）

橋口は、札幌農学校初代教頭クラーク博士が学長だったマサチューセッツ農科大学で学び、帰国後に札幌農学校校長を経て、北海道庁第二部長となっている。

1895年、初代台湾総督の樺山資紀の甥にあたる橋口は、初代殖産局長（次々代は新渡戸稲造）となる。

前年にメキシコ植民地の踏査があった橋口は、世界熱帯国中の珈琲栽培の適地について述べている^[6]。この経験によって橋口は、台湾にコーヒー試植の必要を認めた^[7]。そして「當殖産課ニ於テハ本島ニ珈琲事業ヲ輸入セン方針ヲ以テ」とある^[8]。

こうして殖産局ではその下部組織にあたる農事試験場や恒春熱帯植物殖育場などにおいて、珈琲栽培の試験が行われていった。

このように、橋口殖産局長による珈琲栽培の決定は「台湾珈琲の父」と呼べるほど重要なものであった。

1895年、珈琲の種子を外務省経由でメキシコより取り寄せた橋口^[9]は、その種子を次項の横山壮次郎に、後に北大演習林が開設される埔里に播種させる。

1897年、台北県知事になった橋口は、県下に珈琲木があることを知り、この珈琲木の種苗を得るべく依頼したのも横山だった。

横山とは、札幌農学校校長時の教え子で、北海道庁第二部の部下で、薩摩藩出身という強いつながりが3つもあった。

横山壮次郎（札幌農学校第8期生、札幌農学校助教授）（台湾在勤1895-1906）

1895年、最初に渡台した北大卒業生である横山は殖産局に所属した。横山の家には必ず職務の参考品がありコーヒーノキが2本あった^[10]。薩摩藩出身で、初代文部大臣森有礼の甥にあたる。

1897年「明治三十年五月埔里社撫墾署事務報告」^[11]には埔里社撫墾署長事務取扱の横山の名前が、七月には「昨年（1896年）総督府殖産部ヨリ試植ノ為回送相成リタル珈琲ノ種子…播種タルモ…発芽ヲ見ズ…本年ハ先ツ全力ヲ茲ニ注キ…珈琲…栽培ヲ施サント欲ス」^[12]とあり、横山の押印もある。この珈琲の種子は、上記の通り橋口が取り寄せたものであった。

また、「珈琲樹栽培調査復命書」^[8]には、「珈琲栽培は高地ヲ要スルヲ以ッテ現今ノ撫墾署所在地

ヲ適当トス」とある。そのため、埔里社撫墾署長事務取扱の職務にあった横山は、当時11箇所あった撫墾署の中で最も高地であった埔里社撫墾署に「全力ヲ茲ニ注キ」種苗を播栽したのは間違いない。なお撫墾署設立は橋口が計画したもので、次々項の柳本通義が事務総括の責任を負っていた。

また、1897年横山は橋口の命を受け、台北県擺接堡冷水坑庄（現新北市土城区冷水坑）の珈琲木を調査すると共に、珈琲の種苗を得て、台北市東門外（現台湾大学医学院）の殖産局農事試験場に播栽し育苗する。このことは、『横山壮次郎君』「故横山壮次郎君追懷録」^[7]に詳しい。

そしてこの珈琲の苗木が、1902年3月、次項の新渡戸稲造が創設した恒春熱帯植物殖育場に最初に移植された珈琲木となった。

新渡戸が編纂兼発行者となった『横山壮次郎君』の「故人を懷ふ」^[13]には、「職務の関係上又同窓の縁故があるから殆毎日逢ふた、逢ふ毎に親密の程度も益加はる様になった」と述べる関係となっている。

新渡戸稲造（札幌農学校第2期生、札幌農学校教授）（台湾在勤1901-1904）

1901年、新渡戸は『武士道』を出版した翌年、台湾総督府長官の後藤新平により三顧の礼で殖産局長として迎えられた。

殖産局長となった新渡戸は「臺灣に赴任するや専ら札幌出身者のみを用ゐて駒場農科の系統を引いたものは一人も呼ばない呼ばないのみならず寧ろ大に排斥した^[14]」とあり、東大卒業生よりも北大卒業生を重用した。

1901年、新渡戸は田代安定による「熱帯植物殖育場創設之議」を採択し、1902年殖産局恒春熱帯植物殖育場が創設され、横山が育苗した珈琲木が、同場の最初の母樹となった。このことは『横山壮次郎君』「故横山壮次郎君追懷録」^[7]に「明治三十五年恒春殖育場創設際同苗二百本を横山君の厚意に依て配布を受け之を携帯して小字テラソ母樹園内に栽付一小試験區を開けり便ち殖育場コーヒー木栽培の嚆矢と爲す」とある。

1905年、新渡戸は、殖産局恒春熱帯植物殖育場を訪れた（図2）。



図2 右上から時計回りに、横山壮次郎、新渡戸稲造、柳本通義、東條秀介
(1905年台湾統治状況視察の新渡戸稲造、高岡熊雄ら一行 北海道大学大学文書館所蔵)

この写真は、横山壮次郎→新渡戸稲造→柳本通義と札幌農学校の卒業生同志が台湾の珈琲栽培でつながっている重要な証拠である。

この時、新渡戸は当時試植中の珈琲木に就いて「特に奨励の辞」を与えている（「前殖産局長新渡戸博士来場ノ事」^[15]）。

新渡戸は札幌農学校では学生・教師時代ともに外国人教師と珈琲を飲んでいたはずで、また欧米留学時代、売店で珈琲を飲んだ記録もあり、欧米の珈琲文化に直に触れていることから、珈琲産業が有望であることは肌で感じていた。そのため珈琲栽培に「特に奨励の辞」を与えたのだろう。

つまり新渡戸の採択があったからこそ、この恒春熱帯植物殖育場が創設され珈琲栽培が始まり、そこを訪れた新渡戸が珈琲栽培に「特に奨励の辞」を与えたからこそ、当時3年目で試植中だった珈琲木の栽培が本格的に始動し、珈琲栽培の成功につながったと言えよう。こう考えれば新渡戸は台湾珈琲の歴史に必要不可欠な人物であったと言っ

ても過言ではない。

さらに、この時の柳本は恒春熱帯植物殖育場の技師になったばかりであり、新渡戸による珈琲栽培に「特に奨励の辞」は強く響いたことだろう。

柳本通義（札幌農学校第1期生）（台湾在勤1896-1907）

柳本は札幌農学校第1期生でクラーク博士から直接講義を受けた。北海道庁勤務時代は橋口文蔵の部下であり、橋口の意向で殖産局へ採用されている。

また、新渡戸とは東京英語学校、札幌農学校で共に学び、札幌時代から公私に渡って交流を重ねた（柳本通義の生涯^[16]）。新渡戸の不在中は殖産局長代理も任されていた。

1905年、柳本は恒春庁庁長、殖産局恒春熱帯植物殖育場技師となり、新渡戸の奨励の下、当時3年目で試植中だった珈琲木の栽培が本格的に始動した。

1907年、殖産局博覧会委員会を兼務していた委員長の柳本と幹事の横山は、上野公園で行われた東京勸業博覧会にこの珈琲を出品している。

また、柳本は次項の川上瀧彌を推薦し、台湾総督府殖産局に採用された。

川上瀧彌（札幌農学校第18期生）（台湾在勤1903-1915）

1903年、川上は植物学教室の恩師宮部金吾へ手紙を送り、宮部と札幌農学校の同期の新渡戸稲造への進言を依頼し、殖産局長代理として柳本通義が推薦し、台湾総督府殖産局に採用された（この経緯は「台湾へ渡った北大農学部卒業生たち」⁵に詳しく述べられている）。

川上の主たる業務は、台湾総督府の財政に有益となる植物の調査であり、台湾全島をくまなく踏査し、1910年『台湾植物目録』を編纂し、1915年台湾総督府博物館（現国立台湾博物館）の初代館長に就任した。

1903年、川上は横山と台北のミカン園で病虫害の調査を行っている^[17]。

二人は踏査を重視する研究者同士であり、幾度と無く埔里を訪れている。

1907年、川上が助手と埔里を訪れ、アラビカコーヒーノキの標本を採集した（図3）。

川上による「嗚呼横山先生」^[18]には「臺灣に赴任せる折は、先生は公私とも何かと懇切を盡され、余の研究調査などには一方ならず便宜を與へられたり」とあることから、十年前の1897年に横山が埔里で珈琲栽培に意気込んでいたが、その情報を基にこの標本が得られたに違いない。

1907年以降1915年まで、植物標本のラベルによると毎年のように川上が埔里を訪れていることから、埔里のコーヒーノキについても精通していたことが窺える。



図3 1907年埔里アラビカコーヒー（林業試験所植物標本館所蔵）

北大演習林の開設と北大卒業生がつないだコーヒー

1917年、台湾地理中心の埔里に北大演習林（北海道帝国大学農学部附属台湾演習林派出所）が開設された。

1920年、菱葺屋根が特徴の北大演習林事務室が建築され、2011年、南投縣政府歴史建築に古跡指定される（図4）。

この菱葺屋根は、北大演習林職員の子孫時代の旧林学教室の古河講堂や、旧札幌農学校演武場の

札幌市時計台など古い北大建築物に見られ、雪に強い構造を持つ。降雪のない埔里にこの菱葺屋根が用いられた北大演習林事務室は、北大建築物の証拠だと言えよう。

1920年の埔里では、1895年橋口が取り寄せた珈琲の種子が、1896年横山によって播種され、1907年に川上が標本として採集し、そのコーヒーノキがさらに繁殖していたのは間違いない。

次項の笹尾修道によれば、樹齢十二、三年生とある^[19]。このことから、北大演習林のコーヒーノキは、横山が植え、川上が標本を採集した子孫の苗が、川上とつながりがあった北大演習林職員によって1920年頃に植えられたと考えられる。



図4 旧北大演習林事務室（南投縣政府歴史建築）とコーヒーノキ 2022年11月撮影

笹尾修道（北海道帝国大学林学実科大正12年卒）（北大演習林在勤1930-1937）

年表（笹尾修道による北大演習林珈琲）

1	1931	12月 北大演習林の珈琲園で栽培されたコーヒーを製造する
2	1933	3月、12月 コーヒーノキを播種
3	1934	7月 北大演習林の副産物としてコーヒー栽培を挙げる
4	1936	3月、6月 1933年に播種し育苗したコーヒーノキを定植
5	1938	12月 本島コーヒー栽培史上に未だ嘗て見ない好成绩を挙げる

年表1 開設当初、北大演習林では珈琲栽培の計画はなかったが、笹尾が主任の1931年には既に珈琲園ができていたことが新聞記事になってい

る^[20]。そして、この新聞記事が北大演習林による珈琲栽培の最も古い記録となる。以下は新聞記事の抜粋で、笹尾が北大演習林珈琲を製造し優良品を得たこと、副業としても有望なことなどが2500字にわたって詳しく記されている。

台湾日日新報1931年12月14日「盆地で暴風の虞なき 埔里は珈琲の好適地 演習林で立派なコーヒーが出来た 家庭の副業としても有望」(図5)
「埔里街における北海道帝國大學農學部附屬演習林には四十株程の珈琲園あり頃來枝もたわわにルビー宛らの實が稔つてゐたが同演習林主任笹尾修道氏はその實を採取し碎いて試みに粉末のコーヒーを製造してみたところ巷間販賣されてゐる輸入コーヒーに匹敵し優るとも劣らぬ優良品を得た」



図5 1931年12月14日台湾日日新報

年表2 新聞記事の袖見出しに副業としても有望とあり、北大演習林の副産物として珈琲栽培を開始すべく、1933年3月と12月にコーヒーノキを萱野苗圃に播種した^[19]。

年表3 北大演習林開設の翌1918年、初代主任の籠田又平が、演習林派出所主任会議において副産物にして収益を上げるべきもの皆無としたが、1934年の同会議において笹尾はコーヒー栽培を挙げ答申した^[21](演習林派出所主任会議に対する答申書)。

年表4 「翌12年(11年1936年)3月、天塩第一

演習林に転勤の命令があり、都合で6月なかばまで延びたので、萱野苗圃で育苗したコーヒーの苗を、近くの相思樹造林地に植えた。相思樹はシェードツリーとして利用した。』^[22]とあることから、笹尾は部下の山本光市に依頼して定植したと考えられる^[23]。また、6月は山本が雨龍に転勤したので埔里産と萱野苗圃産を笹尾が定植した^[23]。

年表5 臺灣新民報1938年12月22日「本島の珈琲栽培可能性確認さる 大学演習林の間作好成績」^[24](図6)には、「本島コーヒー栽培史上に未だ嘗て見ない好成績を挙げ」とあり、この北大演習林の珈琲栽培の成功は台湾珈琲の歴史として注目に値する。しかしながら、この新聞記事は台湾珈琲の史料としてこれまで埋もれていたものであった。

なお、笹尾は1937年7月に天塩第一へ転勤し、後任の城生鉄血によってコーヒー定植地の手入れが行われたが、1938年の珈琲栽培の成功は笹尾の努力によるものと言えるだろう。



図6 1938年12月22日臺灣新民報

現在の北大演習林と林平三氏のプレートへの反論

2022年から、埔里の旧北大演習林は中興大學埔里實驗林文創園區として、中興大學智慧運輸發展中心が管理している。旧北大演習林の敷地を囲って休園状態となっており、以前の様に北大演習林事務室を間近に見ることはできない(2024年4月現在)。

2023年には、旧北大演習林事務室内に林平三氏の文章付きのプレートが壁に掲げられた。この

プレートでは以下の①②③のように「林平三氏が最後の日本人所長として、北大演習林珈琲の栽培を、開始・成功・基礎を築いた」となっている。そこで笹尾修道氏の名誉のために以下に反論する。

① 日本統治時代の最後の埔里演習林所長(1940年9月-1946年7月)であり、最後の日本人所長であった

→林平三氏の在勤期間は1940年9月-1945年3月(3月5日付けで退職)であり、最後の日本人所長は在勤期間1944年7月-1947年3月の佐々木準長氏である^[25]。

② 台湾にて北海道大学珈琲の栽培方法の研究を開始し、栽培に成功

→年表2、3、4、5のように笹尾修道が北大演習林珈琲を副産物として、1933年に栽培方法の研究を開始し、1938年には成功している。

③ コーヒー栽培も在任中に基礎を築き

→年表2、3、4のように笹尾修道がコーヒー栽培も在任中に基礎を築いている。

②③について

→北大演習林就任前の林平三氏による1939年の新聞記事によると「昨年(1938年)から始めた演習林経営のコーヒー園もあり」^[26]と、笹尾修道が副産物として開始したコーヒー園が、その後経営されていることが林平三氏自身によって報告されている。

「蕃地を踏査して - 台湾にある北大の演習林 - 林平三氏の土産話」(1939年3月4日東京朝日新聞北海道版)

幻の北大演習林珈琲の再現

戦後途絶え、幻となってしまった北大演習林珈琲。この北大演習林珈琲を甦らせるべく、筆者は北大演習林と同じ埔里で2020年から栽培を開始した。

埔里で栽培されていた北大演習林珈琲は、「殆ど手入れをしない」ことがわかっている^[20]。こ

れを無肥料・無農薬の北大式自然農とし、北大演習林珈琲の再現に取り組んでいる。

具体的には、生態系へ悪影響を及ぼす外来種植物の駆除を続けながら、埔里に自生する多種多様な植物をシェードツリーとして育成し、北大演習林珈琲の子孫を栽培している。4年経過した現在では、百年前の生態系へ回復しつつあり、動植物にあふれる生物多様性豊かな珈琲園となっている。

この北大式自然農での珈琲栽培は、慣行農法に比べ生長が極めて遅く、収穫量も極めて少ない。また、シェードツリーの育成には数年以上かかるため、今のところ収穫量はほとんどない。目下、シェードツリーが高くなる数年後の安定供給を目指している所である。

終わりに

1895橋口文蔵→1897横山壮次郎→1901新渡戸稲造→1905柳本通義→1907川上瀧彌→1917北大演習林

1895年北大校長からスタートした珈琲栽培が、駅伝の襷のごとく北大卒業生たちにつながり、1917年開設の北大演習林でゴールした。

それから百年。

2017年に北大演習林百年祭を開いた北大卒業生が、笹尾修道から襷を受けとった。

先輩たちがつないだ歴史の重みを感じつつ、幻となった北大演習林珈琲を甦らせていきたい。

参考文献一覧

- [1] 菅大志, “演習林と珈琲の百年物語,” 台湾情報誌「交流」, pp. 7-14, No. 921, 2017.
- [2] 菅大志, “続・演習林と珈琲の百年物語,” 台湾情報誌「交流」, pp. 8-17, No. 923, 2018.
- [3] 菅大志, “台湾珈琲の歴史再発見埔里演習林,” C³offee 珈琲誌, pp. 38-40, vol. 10, 2017.
- [4] 菅大志, “台湾通信,” 北大生協「きぼうの虹」, No.375-No.388, 2018-2020.
- [5] 山本美穂子, “台湾へ渡った北大農学部卒業生たち,” 北海道大学大学文書館年報, pp.

- 15-41, 2011.
- [6] 橋口兼清, “橋口文藏遺事録,” p. 153, 1906.
- [7] 田代安定, “横山壯次郎君「故横山壯次郎君追懷録」,” pp. 120-121, 1910.
- [8] 山田正通, “珈琲栽培状況調査復命書,” 1897.
- [9] 木村匡, “布哇咖啡及マニ烟草種子取寄方外務省へ依頼,” 明治二十八年乙種永久保存第二十四卷, 臺灣總督府檔案, 1896.
- [10] 田代安定, “横山壯次郎君「故横山壯次郎君追懷録」,” pp. 106-107, 1910.
- [11] 横山壯次郎, “明治三十年五月中埔里社撫墾署事務報告,” 埔里社撫墾署, 1897.
- [12] “明治三十年七月中埔里社撫墾署事務報告,” 埔里社撫墾署, 1897.
- [13] 新渡戸稲造, “横山壯次郎君「故人を懷ふ」,” p. 40, 1910.
- [14] 千朶木仙史, 学界文壇時代之新人「農學博士法學博士新渡戸稲造氏」, 天地堂, 1908, p. 2.
- [15] 田代安定, “前殖産局長新渡戸博士来場ノ事,” 恒春熱帯植物殖育場事業報告第5輯, p. 267, 1914.
- [16] 神埜努, 柳本通義の生涯—クラークの直弟子・札幌農学校第一期生, 共同文化社, 1995, p. 269.
- [17] 川上瀧彌, 「台北に赴任して」1903年12月4日付宮部金吾宛て川上瀧彌書簡, 1903.
- [18] 川上瀧彌, “横山壯次郎君「嗚呼横山先生」,” pp. 139-140, 1910.
- [19] 笹尾修道, “臺灣演習林派出所,” 演習林彙報第一輯, p. 124, 1933.
- [20] 台湾日日新報, 盆地で暴風の虞なき 埔里は珈琲の好適地 演習林で立派なコーヒーが出来た, 1931年12月14日.
- [21] 笹尾修道, “演習林派出所主任会議に対する答申書,” 北海道帝國大學農學部附屬演習林, 1934.
- [22] 笹尾修道, “台湾、天塩第一、雨龍演習林の思い出,” 北大演習林80年, p. 64, 1981.
- [23] 北海道帝國大學農學部附屬臺灣演習林, 臺灣演習林造林基帳.
- [24] 臺灣新民報, “本島の珈琲栽培可能性確認さる 大学演習林の間作好成績,” 1938年12月22日.
- [25] “職員名簿元演習林台湾演習林,” 北大演習林80年, pp. 171-172, 1981.
- [26] 東京朝日新聞北海道版, “蕃地を踏査して—台湾にある北大の演習林—林平三氏の土産話,” 1939年3月4日.

日本語パートナーズ台湾 第8期活動報告

「日本語パートナーズ派遣事業」は、日本からアジアの中学・高校等に、現地の日本語教師の授業のアシスタントや日本文化の紹介等を行う「日本語パートナーズ」を派遣し、日本語教育を支援する事業です。台湾では独立行政法人国際交流基金から当協会が一部を受託し実施しています。

2023年度は台湾第8期として10名が2023年9月13日から12月20日までの約3ヶ月間、台湾各地の高校に派遣されました。今回はその中から2名の日本語パートナーズの活動を紹介します。

たくさんの学びと経験をこれからに 岡野 奈々

私は台湾8期として2023年9月半ばから同年12月半ばまで宜蘭に派遣されていました。派遣校は宜蘭高校、巡回校は宜蘭商業職業高校でした。派遣されていた期間は約3ヶ月と短いですが、私が活動してきたことを紹介します。

私の主な出勤先は宜蘭高校で朝9時から夕方5時までの勤務でした。生活CP先生(生活のサポートをしてくれる先生)から自転車をお借りしていたので自転車で通っていました。職員室には少し日本語を話せる先生がいらっしゃる、あまり中国語ができない私をたくさん気遣ってくださりました。担当した生徒は日本語や日本文化にとっても熱心で積極的に日本語クラブに参加してくれたり、休み時間には私に会いに職員室まで来てくれたりする子もいました。私にとって今回の派遣は初めての海外でもあったので不安と緊張が大きかった初めの頃は台湾の生徒、先生方の優しさにたくさん励まされました。

学校生活に慣れてくると、生徒の日本語クラブ(週3回)を開講するようになりました。生徒は基本的に日本語専攻をしているので会話は全て日本語で行われました。学年ごとに日本語習熟度が異なるので、わからない日本語が出てくると上級

生が説明する、通訳するという良い循環が見られました。

日本語クラブで取り入れた文化紹介で一番生徒の興味を引いたのは抹茶体験でした。抹茶を飲んだことがある生徒は複数人いましたが、台湾で飲む抹茶は抹茶ラテになっていることが多く、抹茶を点てて茶碗で飲んだことがある生徒はいませんでした。私自身茶道を習っていた経験がないので、お手本を見せる際に手こずらないように学校から茶器を借りて毎朝自分で抹茶を立てる練習をしました。日本文化を教えるならばまずは自分が日本文化に詳しくなければならぬと感じたのです。日本人感覚でやり過ぎてしまうことも言語化し



抹茶を点てる見本

なければなりません。その難しさと私自身も成長できる機会を感じ、試行錯誤する時間はとても有意義でした。

休日は出かけることが多く、任地のことを知るべく、博物館や観光スポットとなっているところを一通り回りました。宜蘭は私の地元に近い部分が多く、とても親近感が湧きます。葱がとても有名で葱油餅は宜蘭の名物です。グルメな人が多く、先生や生徒に聞くとどこのお店が美味しかったかたくさん教えてください、連れて行ってくれます。私は飽きるまで同じものを食べ続けてしまう性分なのですが、おかげでたくさんの宜蘭グルメを賞味できました。

季節の行事として私が派遣期間中にあった大きなイベントは中秋節と国慶節でした。特に中秋節はみんなでお祝いするので先生の親戚の家のBBQに参加したり、住んでいるマンションの大家さん一家とBBQしたり、普段関われない人と交流を持つことができで新鮮な気持ちでした。何回かハイキングにも出かけ、旅先での新しい出会いや壮大な景色を楽しむこともできました。誰かと行動することもあったのですが1人旅も多く、

1人で出かけるたびに強くなった気がして自信につながりました。

私は将来、海外で日本語教師をしたいと考えているので今回の台湾派遣は私にとって自分の将来像を構築する上でとても大きな意味を持っています。初めての海外生活で言葉もあまり通じない中、どれだけのことのできるのか、何を経験することができるのか、挑戦の連続でした。頑張ったら頑張った分、生徒や先生からの反応がよく、異文化を知ることへの興味と熱意は上がることはもちろん、教えることのやり甲斐も感じられるようになりました。初めての海外、初めての授業が台湾であった私はとても恵まれています。SNSなどを通して生徒や先生と繋がりを保っていきたいですし、これから日本語教師を目指す上でこの経験を忘れずにいたいと思います。

台湾のみなさんのあたたかさを全身で感じた100日間 中道 敦子

私たち台湾8期10名は、2023年9月から12月までの約100日の活動期間でした。活動期間が短い分、それぞれが自分にできることを準備し積極的に活動をして悔いのない派遣期間を過ごせたと思います。

私は彰化県溪湖鎮の国立溪湖高校に派遣されました。溪湖鎮は台中より少し南の彰化県にある町です。気候が良くて空が広く毎日気持ちよく過ご



草嶺古道をハイキング！



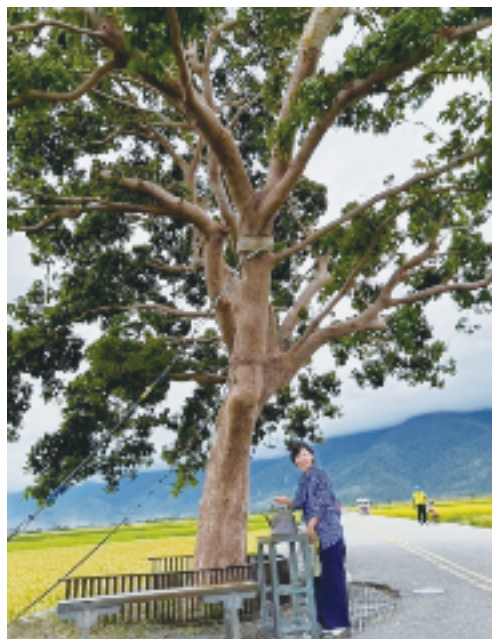
豆乳と飯團（台湾おにぎり）



いつも行っていた朝ごはん屋のご家族

せました。小さい町なので、朝ごはん屋や餅屋、バスの運転手さんなどとすぐに仲良くなれ、どこに行っても私が日本人だとわかると、「日本好きだよ。」「日本に行ったことあるよ。」と声をかけてくれる町の人達にいつも助けられました。食べ物はなんでも安くておいしく、特に学校近くの朝ごはん屋さんの“飯團”という台湾おにぎりは毎日通って食べる程気に入っていました。このおにぎりはもちもちの“紫米”を使っていて、台湾にしかない具がたくさん入っていて一つで満足できます。さらに、このお店のご主人からは庭でとれたバナナや自家製仙草ゼリーなど買った朝ごはん以上のおまけをいただくなど、台湾の方のあたたかさもいただきました。

活動期間中、週末になると同僚の先生から「せっかく台湾にいるんだから台湾を楽しんで！週末はどこに行くの？」と、いわれていたのですが、連休を利用して台東に行くことにしました。目的は“金城武の樹”を見に行くことです。私は90年代から金城武のファンで、「台湾の旅行はまずここに行こう。」と、決めていました。同僚の先生に台東旅行のことを報告すると、同世代の先生たちも「私も金城武好きよ～。同世代の人はみんな好きだよ。」と職員室中大変盛り上がり、先生方との距離がぐっと縮まって仲良くなりました。また、日頃から気にかけてくださり、中秋節には「台湾では月餅を食べるよ。」「柚子（台湾の柚子と呼ばれるものはとても大きいグレープフルーツ大の柑橘類）はこの季節おいしいよ。」など、食を通して台湾の文化をたくさん教えていただきました。



金城武の樹

学校は日本語パートナーズの受け入れ体制が整っており、一日目から授業に参加したり三日目から文化紹介ができたりするなど、初日から最終日までとても充実していました。

自己紹介で私の趣味（手芸や料理）を紹介したところ、先生も学生も興味津々で、定番の浴衣や抹茶体験だけでなく、折り紙を使ったキーホルダーやアクセサリ作り、つまみ細工のアクセサリ、絵馬・お守り作り、みたらし団子、キャラおにぎり、絵巻寿司作りなど実際自分たちが手を動かして日本を知ってもらう体験を三か月間詰め込んで活動させていただけました。必要なものや場所の手配、当日のサポートなどしていただいたおかげで私も楽しんで授業ができました。

溪湖鎮では日本人は私以外見かけることがなく、せっかく日本語を勉強しても実際に使う場面がない環境です。同世代の日本人と交流の機会を持ちたいという学生からの要望があり、日本の中学校とのオンライン交流会を企画しました。日本の学生に質問したいことや日本人に教えたいことを事前に自分の言葉で考え、実際にやり取りをするという時間は、日ごろ日本人と接する機会のない学生たちにとって緊張する場面でもあり、楽しい時間でもあったと思います。私もこの交流会を通して、台湾の高校生が「何をきっかけに日本語に興味を持ったのか」、「日本の何が好きなのか」

を知ることができ、有意義な時間でした。日本語には自信のある学生も「実際に話すと緊張して思ったように話せなかった。次はもっと準備をして思ったことを話したい。」と準備をして、二回目の交流会では積極的に会話して、自信につなげることができたのが私も嬉しかったです。

本当にあっという間に過ぎていった100日間でしたが、これからも町の人や学校の先生方と連絡を取り合い、日本や台湾の文化を共有しあって、台湾でお世話になった方々との縁をつなげて広げていきたいです。



オンライン交流会の様子

台湾高校生日本留学事業 第7期留学中間報告

当協会の台湾高校生日本留学事業では、台湾の高校生が日本の高校に約11ヶ月間留学し、日本の高校生と同じ環境で生活を送りながら、日本の社会・文化・歴史等を学ぶ機会を提供しています。留学した台湾人高校生が将来知日派人材となり、日台間の架け橋として日台関係の更なる発展に寄与すること、及び受入校の日本人高校生等の台湾に対する理解を増進することを目的としています。2023度派遣の第7期生は、2023年8月より留学を開始し、半年が経ちました。今回は、日本の高校生活の中で疑問に感じたこととそれに対する自分の考えについて、留学生3名の報告を紹介いたします。

日本の高校の教育姿勢

東京都立成瀬高等学校 高嘉彤

日本に来て半年が経ちました。自分自身の成長がはっきりとわかります。過去よりも行動や考え方においてより多くのことを考慮できるようになり、衝動的な決定をすることもありません。

学校で理解できないことは、試験の方法が台湾と本当に大きく異なることです。台湾では選択式ですが、文脈を理解し、論理的推論をすることが重要です。しかし、日本の授業や試験は暗記を重視し、自分で考えたり推論したりする問題が少ないです。このような「詰め込み」が本当に学生が知識を吸収するのに役立つのかどうかはわかりませんが、最近、日本の学校のこの試験の方法を理解しました。

台湾は思考を重視していますが、実際に選択式のような試験方法は、勉強していない人でも運によっては得点できることがあります。日本の試験形式は定期考査で、学生が試験前に真剣に勉強しているかどうかを重視しているように感じます。実用性よりも態度を重視しています。両方にはそれぞれメリットとデメリットがありますが、個人的には台湾の試験方法の方が好きです。

もう一つ学業に関連する疑問を抱いていました。どうして日本の試験の問題や内容は台湾と比

べるとずっと簡単なのに、日本のトップ大学は世界的に有名な学校なののでしょうか？

考えてみた結果は、前述のように、日本は非常に「態度」を重視する国であり、幼い頃から責任感を育むことが重要視されているからというもの。また、彼らは自分の興味を育むために時間を多く持ち、将来の職業を探究する機会があります。それに対して、台湾は今も学歴至上主義であり、多くの人が自分の成績に基づいて職業や専門を選択しますが、実際には自分が選んだものが実は好きではないことに気づくことがよくあります。しかし、私は日本の友人と将来の夢の話をするとき、彼らは自分の目標を達成するために必要な努力や自分が選んだことを本当に楽しんでいるかどうかを考えたり、自分の趣味から選ぶことが多いと気付きました。さらに、日本のトップ大学が世界ランキングに入った理由は、これらの大学の研究活動や学術活動と関連しているかもしれません。これらの大学には優れた教員や研究者が多く在籍し、さまざまな分野での研究に取り組んでいます。なので、学生たちはもし趣味がなかったら、すぐ飽きてしまいます。だから、将来の学術や研究への情熱と才能が必要です。これが、これ

らの大学が世界的に高い評価を受けている理由の一つかもしれません。私は、この考え方は台湾の

高校生が学ぶべきものだと思います。



剣道部で初段をとりました

留学半年間で感じたこと

松戸市松戸高等学校 蘇宣帆

日本の高校で二学期を過ごし、以下四つのことが勉強になりました。

第一に、アジアでよく見られる現象の一つである英語に対する恐怖心です。このため、英語のテストは得意なのに日常会話ができない人が多いです。初回の英語授業で会話を続けられなかった後、クラスメイトが私に「発音かっこよすぎてペアとして緊張感がある。」と言ったことに非常に困惑しました。台湾ではあまり褒められなかった英語は日本で高い評価を得ています。その後ずっと考えて、日本では発音を気に配り、話せる人は凄いのだと思います。台湾の英語教育は文法授業の割合が多く、台湾ではライティングができる人に憧れています。しかし、私にとって、言語は自分の考えをちゃんと伝えるためのツールです。異なる文法や変な発音であっても、言いたいことが正しく伝われば、正式でない場合でも気にする必要はないと思います。

第二に、日本は友人との距離感が台湾よりも遠いです。学校でいつも友人の名前を呼びあっていた私が、一ヶ月ほど経ってから、日本の高校生は

名前を呼ばないことを知りました。友人に尋ねたところ、「小学校の頃はお互いに名前を呼びあっていましたが、中学校から男子には名字で呼ぶようになりました。それで高校では皆を名字で呼びます。それが社会の仕組みです。」という答えを得ました。また、歩く時に友人が手をつなぐことや写真を撮るときにハートを使うことが恥ずかしいを感じることも、台湾とは異なります。大人になるにつれて、距離感が益々広がっていく傾向があります。

第三に、地震の訓練への真剣な態度を尊敬します。台湾と日本はともに複数のプレートの上に位置しています。一年に少なくとも一度の地震の訓練を行っています。台湾では、毎年の地震の訓練が生徒にとって「時間の無駄使い」と思われています。921地震を経験したことのない台湾人は、頻繁な地震という自然災害に対する恐怖心を失っています。それに対して、日本の高校生は台風や地震の防災対策をまじめに取り組んでいます。毎年の防災講習を真剣に受ける人が台湾より何倍も多いです。この態度は、台湾の方も見習ってほし

いです。

最後に、高校生が未来に対して健全な態度を持っています。この点において、日本は台湾の高校生の手本だと思います。日本の教育は特に文系や理系を重視していません。専門学校、大学への進学は、どちらでも尊重されます。人生は勉強だけではなく、自分の興味や才能を見つけることが大切です。それが台湾と全く異なるので、最初は理解できませんでした。多くの留学生や、夢を叶えたいため一人で日本にきた外国人たちと話した後、大体わかりました。台湾の人々は、成績が一番高い学部に進学し、一番給料が高い職業に就き、

一番優秀な人生を過ごすことが最高の人生だと考えています。台湾の生徒たちは、学生時代から、一位を追い求めることが唯一の目標です。しかし人生はテストではありません。正解や一位の人生など存在しません。そのため、自分ができことや一番楽しみにしていることが、成績よりも重要です。学生時代は夢や興味を見つけたり、良い思い出を作ったり、好きなことに全力を尽くす時間です。

以上が、この半年を過ごして感じたことです。かなり成長できたかもしれませんが、今後も頑張ります！



体育祭

コスモスー集団のチカラ

東京都立白鷗高等学校 葉芄安

集団の力はどのくらいの影響があるのでしょうか。実際に日本の高校生たちと一緒に授業をしたり、イベントを準備したり、生活したりしていて、この質問が気になって考えました。

初めて日本の高校に通っていて、日本の高校生たちはまるで複製体みたいで、同じ制服と髪色、授業中も静かにメモしながら先生の話を聞いています。多くの方は自分は他人と違うと見られたくないから、分からなくなったとしても授業中に質問しません。しかし、それは本当にいいのか？人は多様性がある動物なのに、そのままにすると個人的な考えなどはどんどんなくなるかもしれませ

ん。

一方で、台湾の高校の特徴を一言で言えば「自由」と言えますが、学生がよく自己中心的に見えます。私の台湾の高校では、自分が楽をするために校則を破る人が結構いました。しかも、先生たちも適切な時に指導してあげませんでした。そのため、よくない行為が増えていて、学生も良いものと悪いものを判断できなくて、学校の雰囲気が悪くなってしまいました。

今の学校はすごくいい雰囲気ですが、それでも誰も間違えることがないとは限りません。クラスには集団行動を無視する人がやはりいるし、でも良

い指導者や多くの人々が良い方向に向かっているから、みんなはその「悪い人」に影響されていません。その結果、将来の世代にいい習慣と文化を引き継いで、礼儀を正しくマナーを守って、協調性が高く、真面目で謙虚で、周りに迷惑をかけないと言う日本社会の文化が作られました。

留学に来る前は、留学生だから特別な存在であり、他の生徒と異なっても大丈夫だと思っていました。11ヶ月しかない私にはテストや宿題、レポートなど、特に高い成果が求められるわけではないから、最初の頃は気にしていませんでした。皆と過ごす時間が長くなるにつれて、いつの間にか「皆は頑張っているから私も頑張らないと」考え始めました。しかし、受験生のみんなの行動は少数派の私も同調圧力にさらされました。学校は3時40分で終わりだけど、文化祭の準備をし、合唱の練習など6時まで練習していて、そしてまた学校で7時まで勉強することがすごくプレッシャーになりました。自分の考えが周りとは違う時にも空気を読まずにはっきりと言うことが重要だと思うようになりました。

日本の学校生活は、台湾とは違うけど、それで

もたくさん学べることがあります。集団からの拘束力は価値があるといいながら、それぞれの個性や創造力も失うかもしれません。だから、両方の良い点を取り入れたら、素敵な教育環境が築かれると信じています。



沖縄への修学旅行

日本台湾交流協会事業月間報告

4月	内容	場所
6日～明年3月末	日台野球ミュージカル「KANO ～1931 甲子園まで 2000 キロ～」(名義)	愛媛県(坊っちゃん劇場)
7日～20日	益尾知佐子九州大学教授客員派遣(招へい・派遣事業)(助成)	台中市(中興大学)
10日	領事出張サービス	台中市
10日	日本語サロン(主催)	高雄市(高雄事務所日本文化センター)
10日	台湾への緊急無償資金協力目録贈呈式(共催)	東京都(駐日台北経済文化代表事務所)
10日～6月16日	隈研吾一五感の建築世界巡回展(台湾)(名義)	台南市(清景麟品牌形象館)
12日	日本語専門家派遣事業「浴衣体験」(主催)	台北市(景興中)
13日～14日	第7回 AI と日本語教育国際シンポジウム(名義)	新北市(淡江大学)
13日～14日	2024 教育永續國際論壇 ブース出展	台北市(花博公園)
13日～14日	2025 年超高齢化時代の到来—SDGs と地方創生日台青年国際フォーラム(助成)	台南市(中華医事科技大学)
16日	日本台湾交流協会奨学金事業説明会	桃園市(国立中央大学)
17日	日本語の教え方講座(主催)	高雄市(高雄事務所日本文化センター)
18日	領事出張サービス	台南市
19日	2024 年台湾日本研究院年会及び「21 世紀の日本研究と台日関係」国際フォーラム(助成)	台北市(政治大学)
20日	「アニメ、漫画、ゲームと台湾」2024 国際研究会(助成)	台北市(政治大学)
22日	日本語専門家派遣事業(主催)	高雄市(高雄餐旅大学附属高校)
23日	日本語専門家派遣事業「浴衣体験」(主催)	台北市(国立台湾科技大学)
24日	邦人留学生向け安全対策セミナー	桃園市(開南大学)
24日	講演「ご当地グルメでまちおこし!～身近なもので地方創生～」(奥所長)	台南市(南台科技大学)
27日	淡江大学日本語文学科 2024 年日本文知国際シンポジウム並びに西行学会台湾特別大会(名義)	新北市(淡江大学)

日本語専門家派遣事業「浴衣体験」

4月12日・23日、台北市立景興中学校・国立台湾科技大学にて日本語専門家による浴衣体験を実施しました。参加者は、まず浴衣の着方に関するマナーや日本の伝統衣服について学び、その後、実際に着付けを体験しました。参加者からは、「浴衣を見ることはあっても着ることは初めてだった」「着るだけでなく着せる体験もできてよかった」などの感想が寄せられました。



台北市立景興中学校



国立台湾科技大学

維持会員制度について

公益財団法人である当協会では、事業に要する資金の一部を民間資金により補っております。このため設立当初より「維持会員」制度を設け、台湾へ進出して現地の工場、営業所または出張所に駐在員を派遣している企業、台湾と取引関係を有する企業、そのほか台湾に関心を有する企業、団体等にご加入のご協力をお願いしております。

加入いただきました会員の皆様には、台湾の経済開発、市場動向等についての最新情報を提供するため、当協会の会報「交流」（最新台湾経済等の情報、月1回発行）のほか、「台湾の経済DATABOOK」等の各種刊行物、資料を発行・送付しております。また、会員の皆様向けに当協会台北事務所長による台湾情勢に関する「維持会員報告会」を東京において年1回無料で開催している他、「台湾情勢セミナー」を年間数回無料で開催しております。さらに、貿易投資アドバイザーによる相談窓口も設けております。

【維持会員の特典】

1. 各種刊行物、資料の提供
以下の出版物等を随時提供いたします。
 - ・台湾情報誌「交流」（月1回発行）
 - ・台湾の経済DATA BOOK（年1回）
 - ・委託調査（毎年テーマを選定して調査を実施し、報告書として取りまとめたもの）
 - ・その他知財等の調査資料
2. 台湾情勢に関する維持会員報告会御出席
台北事務所長が台湾情勢について報告いたします。
3. 台湾情勢セミナー御出席
台湾の経済産業界の方々を講師として年に数回開催いたします。
4. 貿易相談窓口のご利用
貿易投資アドバイザーによる相談窓口を設けております。本制度に関するご照会、加入お申込みについては「公益財団法人日本台湾交流協会 東京本部 総務部 庶務室」までご連絡ください。

維持会費 1口につき年間12万円

交流

2024年5月 vol.998

2024年5月25日 発行

編集・発行人：花木 出

発行所：郵便番号 106-0032

東京都港区六本木3丁目16番33号

青葉六本木ビル7階

公益財団法人 日本台湾交流協会 総務部

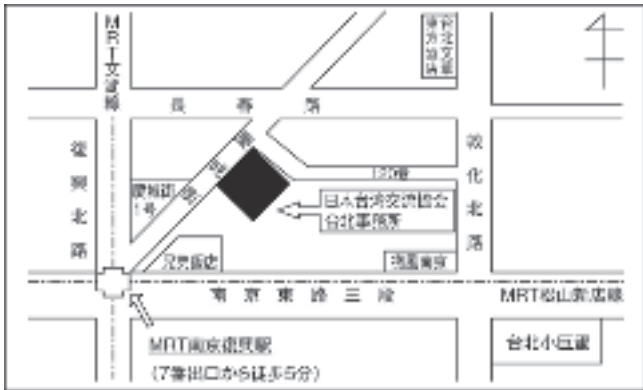
電話 (03) 5573-2600

FAX (03) 5573-2601

URL <http://www.koryu.or.jp>（三事務所共通）

表紙デザイン：文唱堂印刷株式会社

印刷所：株式会社丸井工文社



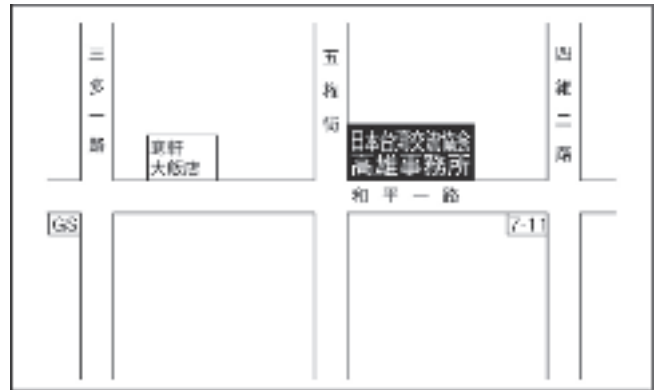
台北事務所：

台北市松山區慶城街28號 通泰大樓

Tong Tai Plaza., No.28, Qingcheng St., Songshan Dist., Taipei City

電話 (886) 2-2713-8000

FAX (886) 2-2713-8787



高雄事務所：

高雄市苓雅區和平一路87號 南和和平大樓9樓・10樓

9F/10F., No.87, Heping 1st Rd., Lingya Dist., kaohsiung City

電話 (886) 7-771-4008 (代)

FAX (886) 2-771-2734

ISSN 0289-9191



交流 Vol.998 2024年5月号

2024年5月25日発行(毎月1回25日発行) 公益財団法人 日本台湾交流協会